

# なだしお事件

1988年7月、神奈川県横須賀市沖で海上自衛隊の潜水艦「なだしお」とつり船「第一富士丸」が衝突して、第一富士丸が沈没しました。浮上してきた潜水艦と釣船が衝突するという大事故でした。



「第一富士丸」の乗客39・乗員9(定員超過)のうち30名が死亡し、17名が重軽傷を負うという痛ましい事故でした。その後の裁判では、なだしお・第一富士丸双方の責任者に有罪判決が下されています。

# 泳げるが故に

この犠牲者の中には、長野県のある若い女性がいました。衝突した直後は、この女性の泳ぐ姿を見ている人も数人いました。彼女は乗馬も行うスポーツウーマン。海上に投げ出された直後は平泳ぎで泳いでいたようです。救助を待って助け出された人たちの中には「あの人は岸まで泳いでたどりついているものだと思っていた」と言う人もいました。

しかし、翌日、水死の状態で見つかったのです。彼女はきっと泳ぎ疲れ果てたのだでしょう。事故の起こった地点が、横須賀港から3kmの地点だったので、泳げると思ったのでしょうか。泳げるという過信が命を落とすことになるなんて何と悲しいことでしょう。

学校の水泳が本当に役に立っているのか問われていると思うのです。

1988年.7.24  
信毎

# 潜水艦、釣り船と衝突

## 沈没、死亡・不明30人

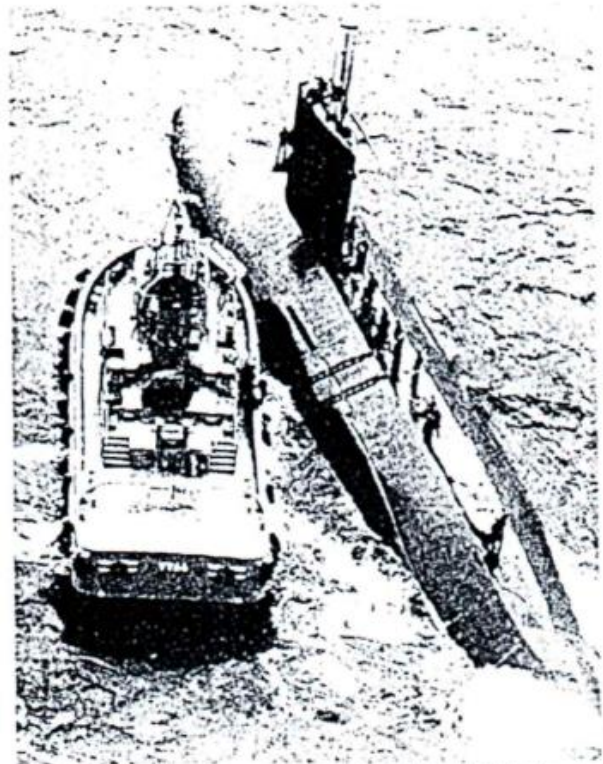
### 19人救出 横須賀沖 視界10<sup>キ</sup>ロなぎ状態

【本紙記者東京二十四日電】潜水艦と釣り船が衝突し、潜水艦が沈没した。乗組員と乗客合わせて三十人が死亡または行方不明とされている。横須賀沖の海上で、視界が十キロに落ちた状態で発生した。潜水艦は、釣り船と衝突した。乗組員と乗客合わせて三十人が死亡または行方不明とされている。横須賀沖の海上で、視界が十キロに落ちた状態で発生した。

#### サロン室に多数の客



乗組員と乗客合わせて三十人が死亡または行方不明とされている。横須賀沖の海上で、視界が十キロに落ちた状態で発生した。



潜水艦と釣り船の衝突現場。乗組員と乗客合わせて三十人が死亡または行方不明とされている。横須賀沖の海上で、視界が十キロに落ちた状態で発生した。

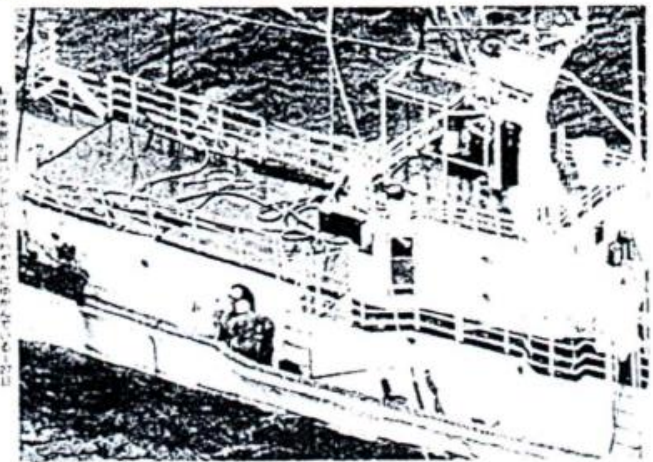
勤め先の話では、湯原さんは優秀な証券ＯＬで、週二回の馬術の練習を欠かさない明るいスポーツウーマン。一年後輩と一緒に乗り合わせながら明暗を分けた橋本佳代子さん(三三)入院中。は「右舷で湯原さんと海を見ているうちにドンと来た。湯原さんが海に投げ出されるのを見た」と話している。



「投げ出され泳いでいた」友人証言

祈る父「どこかの島に」

真美さん1人なぜ



第1 富士丸浮上



船内捜索の客室ベッドや調理室

折り重なる遺体



悲しみ募る 更埴の実家

船内捜索の客室ベッドや調理室... 折り重なる遺体... 悲しみ募る 更埴の実家... 船内捜索の客室ベッドや調理室... 折り重なる遺体... 悲しみ募る 更埴の実家...

明雄さんの電話連絡によると、真美さんと一緒に乗船していて事故後救助された同じ会社の友人の話では、仲間四人で右舷前部のデッキにいたところ、突然目の前に潜水艦が現れ、慌てて後部へ逃げたものの、衝突は瞬時の出来事だったという。この友人は衝突後、海の中へ投げ出された真美さんが平泳ぎで泳いでいるのを見た、と伝えた。この

話を聞いた明雄さんの妹の湯原雅子さん(三九)は「あの子は泳げるから、どこかの島にたどり着いているんだと思いました。あの子は運がいいから…」と唇をかみしめた。

# 命を守るためには

海で遭難した場合、クロールや平泳ぎで泳いではダメです。服を着たら重くなって、体にまとわりついて沈んでしまいます。

それでは、どうしたらよいのでしょうか？まず、漂流物を見つけてつかまります。たったペットボトル一個でも体が浮くのです。それがなかったら、体力を消耗しない背浮きで浮いてみることです。海は塩水なので背浮きなら浮きやすいのです。

そして、ただひたすら救助を待つことが大切です。泳ぎに自信があるからと言って泳いではダメなのです。海には波があります。プールで泳いでいる場合とはまたちがいます。命を守るためには、泳がずに救助を待つことが何よりも大切です。それには背浮きが適しています。

# 着衣泳

着衣泳とは、服を着た状態で浮いたり、移動したりする動作で、水難事故から自分の身を守る技術を身につけることを目的に行います。

(1) 背浮きキック、エレメンタリーバックストロークで泳ぐ(水着で)

(2) 着替える(水着の上に上着、ズボンをつけて、くつをはく)

(3) クロール、平泳ぎで泳ぐ→近代泳法で泳ぎにくさの体験。

(4) 背浮きをしよう。

・服に空気を入れて ・ペットボトルを持って ・レジ袋で

(5) うずまきを作ってただよう。

(6) エレメンタリーバックストロークで泳ごう。

(7) 救助のやり方。

(プールに後ろ向きに倒れる→ペアがペットボトルを投げる。

→受け取ってペットボトルを腹に乗せ、エレメンタリーバックストロークで泳ぐ)

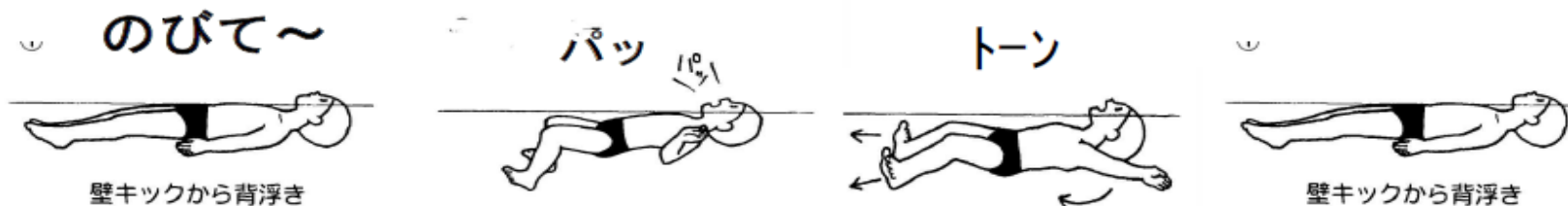


ペットボトルで浮く



# エレメンタリーバックストローク

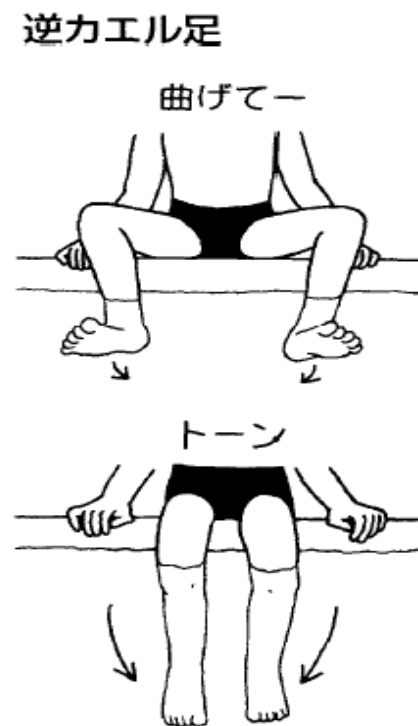
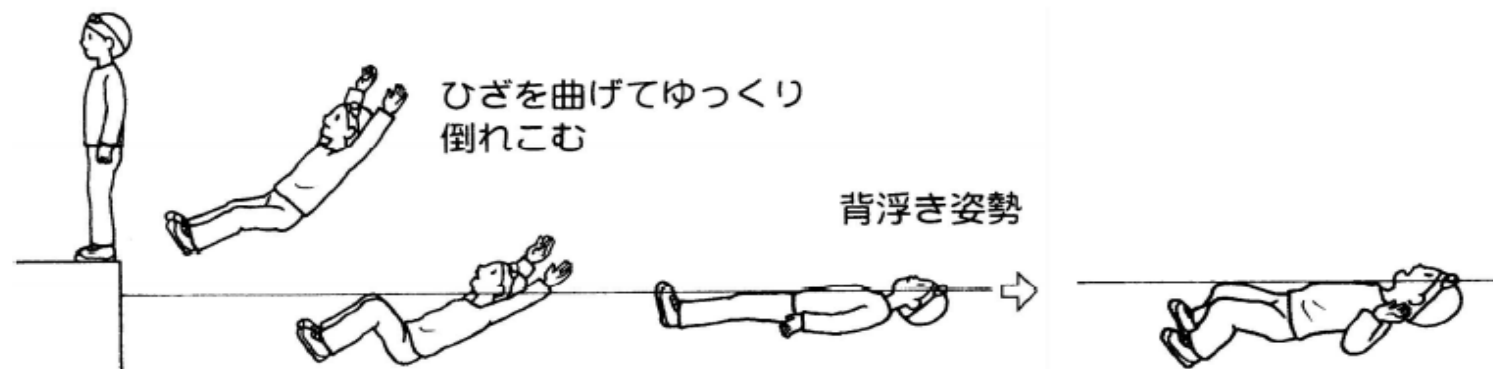
リズム「のびて～・パッ・トーン」



体をのびしたまま背浮きで浮き、進まなくなつてから、次の動作に入る。  
※すぐに手足を動かさない

- ①いきつき「パッ」ができています。
- ②逆カエル足ができる。
- ③手と足を同時にかけている。
- ④「のびてー」で十分体がのびている。

背中からの飛びこみ  
～エレメンタリーバックストロークにつなげる



# このお話のまとめ

学校で習う水泳が、実生活には役に立っていないどころか、なだしお事件の犠牲者のように、泳げる過信が命を落とすことにつながるとすれば、何のために水泳をするのかということを問わなくてはなりません。

近代泳法を学習する一方で、**命を守るための水泳**が必要とされます。**背泳の学習の延長**として、**着衣泳**を行うことや、エレメンタリーバックストロークなどの学習も必要でしょう。